「認識の産婆」としての老賢人

――『ツグミのひげの王さま』（KHM五二）の深層心理学的解釈――

梅内幸信

第一節　高慢という悪夢

『グリム童話集』の中に『ツグミのひげの王さま』（König Drosselbart）という奇妙な魅力をもった童話が収められている。その奇妙な魅力とは、まず初めに、題名の中に見られる「ツグミのひげ」である。「ひげ」にも、「あごひげ」「ほおひげ」「カイゼルひげ」等様々な種類がある。それにもかかわらず、「ツグミのひげ」は、一般的なものとは言えない。加えて、鳥の「ツグミ」と「ひげ」の組み合わせも奇妙である。しかしながら、この童話の奇妙な魅力とは、本質的には、この「ツグミのひげ」からくるものではない。それは、むしろ、高慢な姫が、浮世の辛さを体験し、最終的に「謙虚さ」を獲得するところから生ずるものと判断される。一言で「謙虚さを獲得する」とは言っても、人間にとって、しかも、高慢な人間にとって、このことは極めて難しい課題であると考えられる。ましてや、「高慢と偏見」が、オースティンの『高慢と偏見』において描かれているように、社会的制度の中における男性と女性の役割という形で慣習化されている場合には、この高慢と偏見から脱することは、人間にとって極めて難しい課題となると言わざるをえない。[1]

不思議なことに、この『ツグミのひげの王さま』は、童話に特有な形式は具えているものの、童話によく見られる「魔法」は全く見られない。この童話は、かなり現実的に描写されており、この点においては、「短編小説風童話」[2]とも呼びうるものである。ただし、この物語は、やはり本質的には「童話」に属していることを銘記しておかねばならない。というのも、この物語において、童話に典型的な魔法は見られないものの、「高慢な姫が、浮世の辛さを体験し、謙虚な女性となる」という人格の変化は、まさしく人生における一種の「魔法」と見なされうると考えられるからである。

さて、物語の中では高慢な姫が、父親の命によって貧しい旅芸人と結婚させられ、人生の辛酸をなめる羽目となる。姫は、その高慢の鼻をへし折られ、やがては貧しい生活に適応し、その後、城の台所で小間使いとして働く。それは、姫が城の台所での余り物を壺に入れて家にもち帰り、旅芸人と食事するといった哀れな生活である。ところが、ある日、城の宴会を覗き見たとき姫は、昔の華やかな宮廷生活を思いだし、我が身の悲惨さを呪う。そのとき、城の王が、姫を無理やり舞踏会に誘い込み、姫と踊ろうとする。姫は、逃げだそうとするにもかかわらず、舞踏会に力づくで連れ戻される。姫が夢中で逃げだそうとすると、食べ物を入れた壺が床に落ちて壊れ、その中身があたり一面に散らばってしまう。恥ずかしさのあまり姫は、穴があったら入りたいと願うほどなのであるが、しかし、そのとき王は、自分が例の旅芸人であること、そして、一連の辛い試練は、姫の高慢な態度を改めさせるための芝居であったことを姫に告げる。すると、姫は、自らの非を悟り、自分はツグミのひげの王と結婚するにふさわしくないと、王に応える。しかし、ツグミのひげの王は、この人格の変化を遂げ、生まれ変わった姫に満足し、盛大な結婚式を挙げるのである。

この「食べ物を入れた壺が床に落ちて壊れ、その中身があたり一面に散らばってしまう」場面が、ある意味においては、悲劇における「破局」に当たるのであるが、しかし、この童話においては、この後に起こるものは、目を覆いたくなるような悲劇ではなく、逆に、華やかさに満ちた幸福なのである。悲惨な貧乏生活から華やかな結婚式へと急転するコントラ

ストもさることながら、ここで読者に感動を与えるものは、姫が、ツグミのひげの王の愛に支えられながらであるとはいえ、まさしく「人生の悪夢」から目覚めたという「悟りの喜び」に他ならない。同時に、物語と共に、読者も「人生の悪夢」から目覚めたような気分に捕われ、姫の流す後悔の涙によって、読者の心も清められる思いに駆られる。ここに、この童話の「奇妙な魅力」がある。しかしながら、この魅力の真価は、さらに詳細に分析してみなければ、到底理解されえないものである。

人間にとって、不安から発する「絶望」は「死に至る病」であり、[3] 退屈の解消は人生に課せられた重大な課題であると言わざるをえない。まさしくショーペンハウアーの言うごとく、人生第一の課題である「生活の糧の獲得」を除けば、次には「退屈から逃れること」が人生の重大な課題となる。退屈は、人生が欲望と幻影によって揺り動かされるところから生じ、退屈を逃れようとして欲望と幻影を克服すると、今度は「現存在の完全なる不毛と空しさ」が現れるのである。[4] 不安と退屈は、もしそれが解消されなければ、「無気味なもの」となって、猛禽のごとく人間に襲いかかることとなる。一般に、人間の存在を脅かすものは、大きく分けて、「死への恐怖」「欲望の抑圧」「愚かさ」という三つの範疇から生ずると言えよう。[5] それら三つの範疇においては、人生にあって人間を惑わす実に種々の具体的要因が想定される。主として、文学作品の解釈から導きだせる要因を列挙してみるだけでも、次のようなものが考えられる。

一、「死への恐怖」

「死への恐怖、潔癖さ」「目に関する恐怖、去勢コンプレックス」「失恋」

二、「欲望の抑圧」

「欲望の抑圧、官能の誘惑」「厳格過ぎる父親、潔癖過ぎる母親、甘えることができなかった」「欲望の抑圧」「虚

栄、高慢、退屈」「金銭欲」「永遠の若さ、虚栄」「放蕩生活、欲望の抑圧」

三、「愚かさ」

「厳格過ぎる祖父、父親の無関心、母親の憎悪」「欲望の追求」「過剰な情熱」「出生の秘密」「現実からの乖離、窒息状態」「社交不足、認識不足」「小心翼々とした生活、認識不足」[6]

これら三つの範疇は、「愚かさ」を初めとして、「欲望の抑圧」も「死への恐怖」も、よくよく考えると人間の人生から切り離せないものである。この関連において、確かに三大範疇そのものではないとはいえ、しかし、第二の範疇に分類されている「高慢」も、「虚栄による判断の過ち」として、人間の「愚かさ」に数えられるではあろう。

反宗教改革の嵐が荒れ狂い、古い世界と新しい世界との二元的生活感情に支配されていたバロックの時代に、inscriptio－pictura－subscriptio という三段構成から成るエムブレマーティクが、爆発的に流行した。そこには、エジプト神官の智恵、古代象形文字、ギリシア・ローマ時代の警句や碑銘、イソップ寓話、古代天文学、旧約聖書の題材、古代神話、ピタゴラス学派の幾何学的図形、錬金術等の影響が流入している。この時代の数多くあるエムブレームの中に、「亀を捕えて飛んでいる鷲の絵」を pictura としてもつ一枚のエムブレームがある。その inscriptio には、「一層激しく墜落するために」（VT LAPSV GRAVIORE RVAT）という警句が、ラテン語で書かれている。そして、その subscriptio には、「亀が鷲に捕えられ、大空高く運び上げられたとき、亀は、翼を獲得したものと思った。そのあさましい亀は、それがはなはだ尊き恩寵によるにもかかわらず、間もなく我を忘れて、己の下に見えるものをすべて軽蔑した。しかし、亀が自分を天に輝く星だと思っている間に、鷲は亀を岩めがけて落とし、亀は、岩にぶつかってこなごなに砕けてしまう」という教訓がドイツ語で述べられている。[7] このエンブレームの核心は、端的に言うと、「高慢への警告」に他ならない。

虚栄から生ずる「高慢」は、とりわけ女性に限定してみると、女性にとって人生最大の罠になる危険性を秘めている。一旦この欲望に捕われると、それは、まるで悪夢のように女性の人生を暗いベールで包み、人生の希望の光を遮り、人生の萌芽を台無しにしてしまいかねない。この関連において肝腎なことは、高慢に捕われる女性は、それが人生の悪夢であるにもかかわらず、その事実に全く気づかないという点である。従って、この悪夢を見ている女性は、その悪夢から覚めるためには、まさしく「認識の産婆」の助けを借りざるをえないと思われるのである。

第二節　高慢の報い

『ツグミのひげの王さま』（KHM五二）に登場する姫は、非常に高慢な女性である。このことは、物語の冒頭の部分を読むだけで、幼い読者にも容易に理解されるであろう。この姫の父親である王は、物語の初めから登場しているが、しかし、姫の母親である妃は、物語全体を通じて全く登場していない。従って、妃は姫が幼い頃に死んでしまったものと考えられる。姫の高慢さが、非常に度を越したものであるということから、姫の母親は、かなり早い段階で亡くなったと推定される。というのも、姫がかなり大きくなってから母親が亡くなったとすれば、姫は、母親の教育によってもう少し分別を具えていてしかるべきだと考えられるからである。ところが、姫は、度を越して高慢であるところからして、母親は、姫が分別を具え始める前、すなわち、一〇歳前後のときに亡くなったものと推測される。妃の死後、王は、母親を失った姫を可哀想に思ったのであろう。そのせいで、王は、知らず知らずのうちに、娘を甘やかして育ててしまったと判断される。

王は、大きな宴会を開いて、娘と結婚したいと願う身分の高い人々を自分の城に招待する。ところが、姫は、最初の人

は太り過ぎていたので、「酒だるね！」と言って笑い、次の人は、背が高過ぎたので、「背高のっぽは、風に吹かれて、ふうらふら」と言って笑い、三番目の人は背が低過ぎたので、「ちびのでぶっちょは、ぶきっちょよ」と言って笑い、四番目の人はひどく青白い顔をしていたので、「青ざめた死神さん。」、五番目の人は血色が良過ぎたので、「真っ赤なトサカのオンドリね！」、六番目の人は背中がまがっていたので、「かまどのうしろで乾かした生木だわ！」言って笑うのである。[8] たとえ、姫の言うことが相手の実体を言い当てているにせよ、その欠点を取り上げ、しかも、それを強調して、ことさら本人の前で遠慮会釈無く、他人の面前で言い放つことは、姫という身分のある人間にとっては言うまでもなく、普通の人間にとっても、やはり礼儀を欠くものと言わざるをえない。この調子で、姫は図に乗って、最後に、上席にいた礼儀正しいある一人の王を、この王の顎がちょっとしゃくれていたという理由で、「この人のアゴは、まるでツグミのくちばしだわ」（S.264）と嘲笑する。このとき以来、この王は、「ツグミのひげ」という渾名をもらってしまうのである。しかし、姫の父親である王は、さすがにこれには腹を立て、「おまえなんか、城のどの戸口であろうが、まっさきにやってきた乞食にくれてやる」（S.264）と断言するに至るのである。

実際、その後二、三日して、城の戸口に一人の旅芸人がやってくると、王は、約束通り、この貧しい旅芸人に姫を妻として与えてしまう。この王の態度に姫は驚いて、激しく異を唱えるが、それも無駄である。姫は、すぐさま旅芸人と結婚させられる上に、王は、姫に「さあ、乞食の女房となったおまえが、もうこれいじょうわしの城にいるのは、おかしかろ。亭主といっしょに出てゆくがよい」（S.265）と命ずるのである。

姫は、乞食に手を引かれて、城を出る羽目となる。姫は、自分の足で歩いて、とある大きな森に入ると、つい「まあ、このみごとな森は、どなたのものかしら」（S.265）と、乞食に尋ねる。すると、乞食は「こりゃあ、ツグミのひげの王さまのものさ。あの方と結婚してりゃあ、こりゃあおめえのものなのに」（S.265）と応える。これを聞いて姫は、「あたしっ

て、あわれなお姫さまね、ああ、結婚してりゃよかった、あのツグミのひげの王さまとね！」（S.265）と後悔するのである。やがて、二人が野原を越えて行くと、同じような姫の嘆きが聞かれ、その後二人が大きな街を通り抜けると、三度目に同じような姫の嘆きが聞かれることとなる。しかしながら、すべては後の祭りなのである。

第三節　後悔の涙

姫は、「みすぼらしい、ちっぽけなお家」（S.266）で旅芸人と共に暮らさなければならない。旅芸人は、姫に食事の準備をするよう言いつけるが、しかし、召使いなしでは姫は食事も作れないため、旅芸人は、仕方なく、自分でなんとか食べれるものを作らざるをえない。朝になると、姫は家事のために、旅芸人によって朝早くからたたき起こされる。ところが、数日経って、二人が蓄えを食べ尽くしてしまうと、旅芸人は、生活のために姫に篭を編むよう言いつける。しかし、姫が柳の枝で篭を編み始めるや、柳の枝が姫のきゃしゃな手に刺さって編み続けることができない。すると、旅芸人は、姫に糸紡ぎを言いつけるが、粗い糸が姫の柔らかい指に食い込んで、血が出てくる始末である。仕方なく今度は、旅芸人は、市場で壺や食器を売る商売を言いつける。姫は、市場で物売りをしている自分の姿を、父親の国の人々に見られ、物笑いの種になることを恐れるのであるが、それにもかかわらず、飢え死にしたくなければ、旅芸人の言う通りにするしか他ないのである。

市場での食器売りの商売は、姫が器量良しであったので、最初はうまくゆく。しかし、亭主がその後新しい食器を沢山仕入れてきて、姫がそれを市場の角に座って売っていると、酔っぱらった一人の軽騎兵が馬ごと、並べていた食器の中に飛び込んできて、食器をことごとく粉々に壊してしまう。災難に遭った姫を亭主はひどく叱り、最後には、城の料理手伝

いの女中として働くよう、姫に言いつける。

こうして姫は、城の料理手伝いの女中として、料理番の手足となって、一番きつい仕事を果たさなければならない羽目となる。それでも、この仕事に堪え、「お姫さまは、首からつるした左右の袋に、それぞれ一つずつ小さな壺をしまいこみ、分けてもらった残り物を、この壺の中へ入れて、家へもち帰り、二人は、これを食べて」(S.267) 暮らすのである。

あるとき、その城で王の長男のために婚礼の式が祝われることとなった。姫は、その様子を覗こうと、台所から上の階へ上がって、大広間の戸口に立って、中を眺める。沢山のローソクが灯され、きらびやかな服装の人々が集まっている様を見ると、姫には自分の運命が惨めに思われてくる。こうして、姫は自ら、「自分をおとしめ、これほどまでの貧乏につき落とした、自分の気位の高さと思い上がりを呪」(S.267) うのである。自分の悲運を嘆きながらも、姫は、運び込まれる料理の中から召使いたちが姫に投げ与えたものを、自分の小さな壺に入れて、家にもち帰ろうとする。そうしているとき、突然、豪華な衣装に身を包んだ王が、大広間の中へ入ってきて、戸口に立っている姫の手を取ると、踊りの相手を申し込むのである。姫は、言うまでもなく、それを断るのだが、しかし、そのときその相手が例の「ツグミのひげの王さま」だと知って、ひどく驚いてしまう。姫は逆らうが、しかし、王は無理やり姫を大広間に引き込むのである。すると、「左右の袋をつるしていたヒモが千切れ、中から壺が飛びでて、床に落ち、スープやらパン切れ、料理の切れはしやらが、一面に飛び散って」(S.268) しまう。[9] これを見ると、居合わせた人々は、どっと笑い、姫の粗相を嘲笑うゆえに、姫は、心底、穴があったら入りたいと願うほどの惨めな状況に追いやられるのである。

姫は、恥ずかしさのあまり、戸口から飛びでて、逃げようとすると、階段の所である一人の男に追いつかれ、再び大広間に連れ戻されてしまう。なんと、それはまたしても、「ツグミのひげの王さま」なのであった。さらに姫が驚いたことに、ここでこの王は、優しく姫に次のように、一切の秘密を明かすのである。

「こわがらなくていいよ。おまえといっしょに、あのみすぼらしい小屋でくらしていた旅芸人は、このわたしだったのだよ。おまえを愛していたからこそ、あんな変装をしたのさ。おまえの壺を馬でけ散らした、あの軽騎兵も、このわたしだったのさ。それもこれも、みんな、おまえの気位の高いこころをくじき、わたしを笑いものにしたおまえの思い上がりをこらしめるために、しくんだことなのだよ。」(S.268)

これを聞いて姫は、いよいよ自らの非を悟り、激しく泣きながら、「わたくしは、とんでもないあやまちをおかしました。ですから、わたくしは、あなたの妻となるに値いたしません」(S.268)と、ツグミの王に告げる。ところが、ツグミの王がこれを聞いて、今日が私たちの本当の結婚日だ、と言うと、まもなく姫の父親やその家来が城にやってきて、二人の婚礼の式が盛大に執り行なわれるのである。

第四節　「認識の産婆」としての老賢人

娘を非常に高慢な女性として育ててしまった父親からは、「老賢人」という印象を受けない。しかしながら、高慢な姫によって「ツグミのひげの王」という渾名をもらったにもかかわらず、旅芸人に変装して姫をもらい受けるツグミのひげの王は、明確に「老賢人」のイメージをもっている。『ユング心理学』を著したJ・ヤコービの指摘によると、「男性は物質と化した精神であり、女性は精神に充ち溢れた物質であり、それゆえ男性はその本質において精神に規定され、女性は物質に規定されている」[10]と言われる。まさしくこの意味において、「物質と化した精神」である男性は、「精神に充ち溢れた物質」である女性に「認識という子ども」を産み落とす手伝いをする「認識の産婆」[11]であると考えざるをえない。男性

は、確かに「物質と化した精神」の種子を内包してはいるものの、しかし、「血と肉を具えた認識」を産み落とすことができるものは、真に「女性ないし女性的なるもの」であると推論せざるをえないのである。

物語を読了してから後、熟考すると、高慢な娘に手を焼いた父親が、老賢人のイメージをもつツグミのひげの王に相談をもちかけ、二人で一連の芝居を打ったと考えられないこともない。そうであるとすれば、むろん読者は、ツグミのひげの王の温厚な性格と彼の巧みな芝居にいたく感激することであろう。しかしながら、この物語の核心は、高慢な姫が、身をもって様々な試練に堪え、最終的に後悔の涙を流して自らの非を悟り、「新たな認識を産み落とす」ところにあることを看過してはならない。

上述した「鷲に捕えられ、空高く舞い上がる亀」は、やがては墜落し、こなごなになる運命にある。しかし、それとは全く反対に、姫は、たとえツグミのひげの王の愛に導かれるにしても、高慢という人生の地獄から謙虚さという認識の高みへと、自力で到達するのである。姫の高慢から謙虚さへという、他ならぬこの人格上の大変化、すなわち、その落差が読者に大きな感動を与える大きな契機となっていると思われる。それというのも、このような落差の大きい認識を、人間は一般に、そう簡単には獲得できないからである。

事実、姫といえども、この大きな認識を短期間に獲得したとは思われない。なるほど、短い童話において通常、時間的経過が詳細に語られる訳ではない。しかし、それはともかく、姫が、この短い物語において体験する試練を、筋の展開にそってひとまず列挙してみると、次のようになる。

一、旅芸人（乞食）と結婚させられる。この後、自分の足で歩き、森を通るとき、野原を越えて行くとき、大きな街を通り抜けるときという具合に、三度後悔する。

二、みすぼらしい、ちっぽけな家で暮らさなければならない。
三、召使いなしで、自分で自分のことは片付けなければならない。
四、火おこしや煮炊きを自分でしなければならない。
五、柳の枝で篭を編まなければならない。
六、糸を紡がなければならない。
七、市場に座って、壺や食器を売らなければならない。
八、城で料理番の手足となって、一番きつい仕事をしなければならない。
九、生活のために、城でもらった食べ物を壺に入れて家にもち帰らねばならない。
一〇、大広間で粗相をし、人々の笑いものになる羽目となる。

この中のどれ一つを取ってみても、それは、甘やかされて育った「高慢な姫」にとっては、我慢ならないほどに辛いものであると思われる。しかしながら、これらの試練の大半は、人間として、とりわけ女性として、たとえどんなに辛いものであれ、一度は努力して克服しなければならないものなのである。イメージとシンボルの解釈学の立場から見れば、「篭編み」の「篭」(basket)は、「豊穣一般」と「包容原理の象徴」[12]を指すと言われる。また、「糸紡ぎ」(spinning)は、「創造」と「女らしさ」を指すと言われる。(イメージ・シンボル、五九六-五九七頁参照)従って、姫は、自己を実現するためには、どうしてもこれらの試練を乗り越えねばならないのである。幸い彼女は、ツグミのひげの王の愛に支えられて、徐々に忍耐を獲得し、最終的には、自らの非を認める勇気を獲得するのである。この関連において「ツグミ」は、まさに「愛を表す」(イメージ・シンボル、六三八頁参照)シンボルに他ならない。

実際、壺に入れて家にもち帰ろうとしていた食べ物が、大広間の床に飛び散ることによって、居合わせた人々の笑いものになりながら、自分の夫であると判明したツグミのひげの王に、次のように告白する高慢な姫の変身ぶりは、「灰かぶり」とは違った意味で感動的である。

「わたくしは、とんでもないあやまちをおかしました。ですから、わたくしは、あなたの妻となるに値いたしません。」(S.268)

この落差の大きい変身ぶりは、読者に驚きというよりは、大きな感動を与える。それは、高慢な姫の単なる後悔というよりは、一般に人間にとって極めて大切な認識に他ならない。この意味において、ツグミのひげの王は、姫にとって「認識の産婆」の役割を果たしている老賢人と呼んで差し支えないであろう。

第五節　悪夢からの目覚め

確かに、高慢な姫が、老賢人とも呼びうるツグミのひげの王に導かれて、高い認識を獲得し、自己の人格を完成することは感動的ではある。しかしながら、この童話が読者に大きな感動をもたらす理由には、物語全体の構造に関する、もう一つ重要な秘密が隠されているように思われてならない。この点が指摘されなければ、この物語から生まれる感動の本質が、完全には説明されないままに残ってしまうであろう。

物語の冒頭で姫の父親は、大きな宴会を開いて、娘との結婚を希望する人々をその席に招待し、これらの人々を身分に

応じて全員一列に並ばせるのであるが、それらの人々とは、「最初は王さまたち、次には公爵、侯爵、伯爵、男爵、最後には貴族たち」(S.264)なのである。通常、こういった貴族たちは、宮廷におけるそれなりの礼儀を心得ているものである。それにもかかわらず、姫は、この席上で非常に失礼な態度を取る。その態度は、たとえ父親に甘やかされて育てられたということを認めるにしても、失礼という程度を超えているように思われてならない。その姫の不躾な態度は、とんでもない勘違いを、すなわち、なにかしら悪い夢を見ているもののように思われてならないのである。この点を考慮に入れると、この物語は、ツグミのひげの王の愛に支えられて、姫が自分の悪夢から覚める物語として見なされる可能性がでてくる。実際、姫の悪夢の中に読者も引きずり込まれ、読者が自分と姫とを同一化し、姫と同じような悪夢を見、そして、姫と同じようにその悪夢から覚めるがゆえに、これを追体験する読者に大きな感動が生まれると解釈せざるをえないのである。この点において、この物語は、夢の構造をもっていると言えるであろう。

ところで、ユングは、夢の中の出来事が次のような古典的ドラマの図式に従って展開される点を指摘している。

「一、場所、時、劇の登場人物――夢の始まり――
二、発端(Exposition)――夢課題の提示――
三、急転(Peripetie)――急転はそれぞれの夢の「大黒柱」を成す――
四、解消(Lysis)――夢の解決・帰結であり、その意味深い終局、その補償的な指示――」[13]

この図式は、『ツグミのひげの王さま』という物語の構造そのものにも、ほぼ当てはまると言えよう。この物語の構造も、大筋では(一)姫の高慢な態度(無意識の世界、悪夢)――旅芸人との結婚、(二)旅芸人との辛い生活――台所女

中としての試練、(三) 宴会の開催――姫の恥ずかしい粗相、(四) 姫の後悔の涙――めでたい結婚式、として把握されるのである。このように考察すると、姫が後悔の涙を流すまでの部分が、すべて「悪夢」を描いたものと見なされる。そうすると、この物語において「解消」に当たる部分は、姫が後悔の涙を流す場面に相当することとなる。

この涙は、悲劇における憐憫の涙とはいささか性質を異にしているが、感動の涙として、同じようなカタルシスの働きをもっていると言って良いであろう。そして、この場面が無ければ、この物語は決して文学的には昇華されず、従ってまた、これほどの感動も、美しさも生みだしえなかったと思われる。

以上のように、この物語の内容分析にばかりではなく、構造分析にも深層心理学の理論や概念が見事に適用されうることは、そして、この芸術作品が時空を超えて読者に感動を与えうることは、『ツグミのひげの王さま』という童話が、一民族というよりは、人類の「集合的無意識」から生まれたことの紛れもない証左であると言って差し支えないであろう。

注

(1) ジェーン・オースティン『高慢と偏見』(上・下) 富田彬訳、岩波書店、東京一九九九年、参照。

(2) 拙論〈ホフマン文学における「短編小説風童話」について――童話概念規定の試み――〉鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」第二六号、一九八七年七一―七五頁参照。

(3) キルケゴール『不安の概念』田淵義三郎訳、『世界の名著　四〇』(責任編集、桝田啓三郎) 所収、中央公論社、東京一九七三年、二三八―二四四頁参照。『死に至る病』桝田啓三郎訳、上掲書『世界の名著　四〇』所収、四四一―四五四頁参照。

(4) Vgl. Schopenhauer, Arthur: Werke in zehn Bänden. Band 9, Diogenes Verlag AG, Zürich 1977, S.311.

(5) 拙著『悪魔の霊液――文学に見られる自己の分裂と統合――』同学社、東京一九九七年、一三一―三八四頁参照。

(6) 拙著『童話を読み解く』同学社、東京一九九九年、一二二―一三二頁参照。

（7）拙論「エムブレマーティクの可動性について――『ジムプリツィシムス』と『アジアのバニーゼ』を具体例として――」鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」第一七号所収、鹿児島一九八一年、二〇一―二二七頁参照。

（8）Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. 3 Bde., Philipp Reclam jun. GmbH & Co., Stuttgart 1980, Band 1, S.264.
なお、翻訳に当たっては、次の最終版の翻訳を参考にさせて戴いた。『グリム童話集（二）』金田鬼一訳、岩波書店（文庫）、東京一九八一年、一二〇―一二九頁。／『完訳グリム童話　一・二』小澤俊夫訳、ぎょうせい、東京一九九七年、一、三三九―三四五頁参照。

（9）『ツグミのひげの王さま』は、エーレンベルク手稿（一八一〇年）において、第二一番目の話として収録されている。また、レクラム版におけるレレケの注によると、この童話は、ヤーコプ・グリムが、マイン地方出身のハッセンプフルーク家から収集したもので、初版第一巻（一八一二年）以降、ヘッセン地方はカッセル出身のドルトヒェン・ヴィルトの話における結末部によって補われたと言われる。さらに、第二版以降（一八一九年）、パーダーボルンから出たテキスト――恐らく、ルドヴィーネ・フォン・ハクストハウゼン（Ludowine von Haxthausen）によるものと思われるが――に見られる筆致によって部分的に増補されたと言われる。（Vgl. Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen: a.a.O., Band 3, S.464）
このパーダーボルンから出たテキストに関して、ヨハネス・ボルテとゲオルク・ポリーフカは、次のような興味深い注釈を付している。
「この第三の物語は、違った導入部となっている。王が高慢な娘に、行き当たりばったりの男性との結婚を強いるなどということは、全く見られない。しかし、一人の美男の楽士が、王の城の窓辺にやってくると、彼は王のもとへ召しだされる。この楽士の歌は、王とその娘の気に入る。楽士は、しばらく宮廷に留まり、美しい乙女の向かい側の部屋に住むと、楽士と美しい姫は、互いに相手の部屋の窓に眺め入る。姫は、あるとき楽士がその指で一輪の黄金の紡ぎ車に触れると、そこからすばらしい音色が響き渡る様を目撃する。楽士が再び面前に現れると、姫は楽士に、その黄金の紡ぎ車をもってくるよう頼む。楽士は姫に、紡ぎ車をどのようにして鳴らすかを教えざるをえなくなる。姫は、その方法を学び、自分にもそのような楽器をくれるよう、父親に求める。国中のありとあらゆる金細工師たちが招集されるが、しかし、誰一人として、そのような楽器を作ることができない。そこで姫は、とても悲しくなる。楽士がこれに気づくと、彼は、自分と結婚して下さるおつもりならば、その精巧な楽器をあなたにあげましょうと言う。しかし姫は、非常に高慢な態度で、これを拒絶する。少しし

て姫は、窓から覗くと、楽士が一台の糸巻枠を回すと、この上もなくすばらしい音色が響き渡るのを耳にする。姫は、その楽器が見たくなって、同じような楽器を欲しがる。しかし、金細工師たちは、またしても、そのような精巧な楽器を作りだすことができない。すると、美男の楽士は、自分と結婚して下さるなら、紡ぎ車と糸巻枠を差し上げましょうと言う。すると、姫の紡ぎ車と糸巻枠を欲しがる気持ちが、あまりにも強くなり、姫はこの申し出を受け入れてしまう。しかし、まもなく姫は、後悔し始め、気位の高さから心が安まらない。姫は、自分の約束を撤回しようとするが、それにもかかわらず王は、姫に結婚を強い、婚礼の式が祝われることとなる。こうして、楽士は、姫を森の中にあるみすぼらしい小屋へと連れて行く。その他の部分は、収録された童話と一致しており、加えて、この童話の内容を補っている。舞踏会で、食べ物の入った壺が床に落ちるとき、姫は、恐ろしさのあまり気を失って、くずおれてしまう。目が覚めると、姫は、豪華なベッドに横たわり、そして、そばにいる美男の楽士は、王なのである。」(Bolte, Johannes/Polívka, Georg: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. 4 Bde., Georg Olms Verlag, Hildesheim・New York 1982, 1.Bd., S.443-444)

続けて、ヨハネス・ボルテとゲオルク・ポリーフカは、『ツグミのひげの王さま』のモチーフが、「中世の宮廷叙事詩」にまで遡りうるものである点を、次のように指摘している。

〈この童話の源は、中世の宮廷叙事詩にまで遡りうる。一三〇〇年頃のフランスにおいて、今日では失われてしまっている、ラテン語によるある一つの詩が存在したが、この詩に、ヨン・ハルドルスソン(Jón Halldórsson, †1339)によって書かれたアイスランドの「クラールス・サガ」(Clarussaga)は基づいている。フランケン国王アレクサンダーの美しい娘であるセレーナを獲得するために、ザクセン人の皇帝ティブルティウス(Tiburtius)の息子クラールスは、旅に出る。彼は、身分にふさわしいもてなしを受け、六〇人の乙女たちと共に塔の中に住んでいるセレーナによって食事に招待される。しかし彼は、姫が自分に手渡した卵料理で衣服を汚してしまうと、姫に田舎者のトンマと呼ばれて、塔から追いだされてしまう。辱めを受けてクラールスは、帆船に乗り、別名を名のり、自分の賢明な教師であるペールスに伴われて家へ戻る。ペールスがしつらえた豪華な三張りの天幕が、セレーナの欲しがる気持ちをつのらせる。クラールスがそれぞれの天幕に対して、姫の寝室で一晩過ごすことを要求すると、姫はクラールスにこの代価を認めてしまう。にもかかわらず、寝酒に混ぜられた睡眠薬のために、二度とも即座に眠り込んでしまう。ペールスが侍女のテークラから酒杯の秘密を聞き知って、ようやくクラールスは、三日目の夜、首尾よく眠らずにいることができる。こうして、セレーナも、クラールスの妻となることに同意する。

婚礼の式が、たいそう華やかに執り行なわれ、二人は共に仲良く海を越えて行く。しかし、セレーナが、ある朝目覚めると、すばらしい天幕は、跡形もなく消えうせる。そして、結婚したエスキルファールト王の代わりにセレーナが自分のそばに見るのは、醜い男の楽士である。この楽士は、姫を手ひどく扱い、自分の片足の骨が折れたと称して、姫が自分を背負って旅籠へと行き、教会の戸口で自分たち二人のために物ごいをすることを強いる。こうした辱めを受けているときに姫は、かつて辱めを与えたクラールス王子の姿を目にするが、王子の方は、堂々たるお伴の者たちを引き連れて、姫のそばを通り過ぎる。そのとき王子は、姫にびんたを一つくらわす。これが三度繰り返されるが、しかし、その後姫の夫であるエスキルファールト王がクラールスであり、教師ペールスが楽士であることが判明する。そして、教師ペールスは、姫の幼友だちのテークラを妻に迎える。〉（Bolte, Johannes/Polívka, Georg: a.a.O., S.445）

（10）J・ヤコービ、『ユングの心理学』高橋義孝監修、池田紘一・石田行仁・中谷朝之・百渓三郎共訳、日本教文社、東京一九八〇年、二二四―二二八頁参照。

（11）プラトン『テアイテトス』田中美知太郎訳、岩波書店、東京一九九九年、二九―三七頁参照。この箇所においてソクラテスは、一般に産婆は「そういうことはもう産の出来ない者がしている」と言い、その理由を次のように説明している。「うん、ところで、どうしてそれがこういうことになっているのかというと、その起こりは生むことをしないアルテミスの女神が生むことを世話する役に当てられたからだと言われている。事実それだから――人間の性（さが）というものは無力なもので、無経験な事柄については技術の会得（えとく）ができないものなので――産婆の役も石女（うまずめ）には授けられなかったものの、年をとって産の出来なくなった者にこれを命じなされたという話しなのだ。これはつまりこの者どものもっている生まないという性質がアルテミスの女神御自身のそれに似ているところから、そこを嘉（よみ）せられたものであるということだ。」

ただし、ここでソクラテスが問題としている「産婆」は、「男たちのために取上げの役をつとめるのであって、女たちのためでないということ、しかもその精神の産をみとるのであって、肉体のをではないということがある」という前提が付けられている。しかも、ソクラテス自身は「僕は智を生めない者なのだ」として、その理由を次のように説明している。「そしてそれはすでに多くの人たちが僕に非難したことなのであるが、僕は他人には問いかけるが、自分は、何の知恵もないものだから、何についても何も自分の判断を示さないというのは、いかにも彼らの非難のとおりである。これにはしかし次のような仔細がある。僕は取上げの役の方をしなければならんように神が定め給うているのだ。そして生むことはしないよう

にこれを封じてしまわれたのだ。だから実際のところ、僕自身ちっとも知恵のある者なんかではないし、また僕には、僕自身の精神から出生したというもので、そんな知恵のある発見は何もないしだいなんだ。ところが、僕と一緒になる者、僕と交わりをを結ぶ者はというと、はじめこそ全然無知であると見える者もないではないが、しかしすべては、この交わりが進むにつれて、その人々に神がそれを許し給うならば、その者自身の見るところによっても、また他人に思われるところによっても、驚くばかりの進歩をすることは疑いないのだ。それがしかも、これは明白のことなんだが、何ひとつ僕のところからいまだかつて学んだことがあったためではなく、自分で自分自身のところから多くの美事なものを発見し出産してのことなのだ。もっともその際の取上げは神の御業（みわざ）であって、僕もまたそれには微力をいたしておるのである。〔……〕」

(12) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎他訳、大修館書店、東京一九八八年、四七頁参照。

(13) J・ヤコービ、上掲書、一五〇－一五二頁。